TBS 落語研究会　２０２２年０１月２６日（水）（第６４３回）
新・落語掌事典

田中優子

30 字×12 行

●普請場（黄金の大黒）

普請は元来、仏教で使われた用語だ。特に禅宗の寺で多くの人々に、作業に従事してもらうことを普（あまね）く請うことであった。作業は教典を陰干しにする風通しや、煤払や掃除、茶摘み、堂塔の造営などにわたった。転じて街道の整備や架橋などの土木工事、のちには建築工事にも用いるようになった。普請場は現代風に言うと工事現場であろう。公園など、お仕着せの遊び場がなかった時代の子どもにとって、好奇心がそそられる魅力満載の探検場だったに違いない。そこで掘り当てたのが黄金の大黒。これぞ掘り出し物と言えそうだ。わざわざ埋めたとは考え難いので、おそらく地震や火災などで埋もれてしまったのであろう。他にもまだ何か出てくるかも知れないと考えるのは、欲の張った野暮天か発掘作業を仕事とする考古学者くらいだ。

●曖昧さの意味（紙入れ）

この咄では、旦那夫婦は互いにすべてを知っているのであろう。上方咄では、明らかに知っていると思える夫婦のやり取りもある。ではなぜ、知らない振りをするのか。江戸時代では不義密通は重罪である。男女は不平等であったから、夫が訴えた場合、事実が証明されれば妻とその相手は死罪だった。しかし商いを長い間続けて世間の信頼を得ている者にとっては、その結果信頼を失うだけではなく、その土地に住めなくなってしまう可能性がある。更に不義密通の相手は、前途洋々の若者である。明らかにさせることで三人共に失うものが多過ぎる。誰一人としてプラスになることはない。日本人は曖昧さを好む国民だと言われる。しかし曖昧が好きなわけではなく、結果を想定した上で、浮気は死で贖うほどのものだろうか、と考え、人生にとって何が本当に重要なのかを判断するのである。

●タクアンの塩加減（擬宝珠）

タクアンを漬ける時の塩加減は、季節によって違う。塩は大根の腐敗を防ぐために使うので、気温が高い季節は多め、寒い季節は少なめという具合である。季節による温度差が決め手であるのなら、同じ季節の温度の地域差もあるかも知れない。漬物は保存食だ。大量に漬け込むことが基本になる。そのため古くから、漬け込む器は四斗樽（約七二リットル）が使われた。手で曲がる位に干した大根（当時の大根は現在のものより細い）五十本から百本に対し、大根の重さの四～七パーセントの塩を糠と混ぜて入れる。割合は冬は七対三で、夏は五対五が基準だ。量としては冬二升位から夏六升位になる。咄の終盤で父親が、塔の屋根から降りてきた息子に向かって「三升かそれとも五升か」あるいは「五合か一升か」と聞くと、それに返ってくる答えが、夏の塩加減と同じである。

●雲助という名称（蜘蛛駕籠）

この演目は、ひと組の駕篭かきが巻き起こす幾つかの小咄をオムニバス風にしたものだ。二人が狂言回しのように次々と動きながら咄を展開させるので、情景がイメージし易く映像的でもある。元々は住吉街道を舞台にした『住吉駕篭』という上方咄で『雀駕篭』という別名もある。五街道の街道筋や宿駅には、民間の駕篭屋が存在していた。種類は山道区間専用の山駕籠、公定賃金を支払って乗る武士専用の問屋駕篭、庶民が利用した別名雲助駕篭と呼ばれた宿駕篭などだ。宿駕篭の担ぎ賃は、担ぐ方と乗る方がその場の直接交渉で決めた。担ぎ手である宿駅人足には、出所が定かではない無頼の人足も混じっていた。約束違反や詐欺・ぼったくり、果ては窃盗を生んだ背景のひとつであろう。こうして雲助という名称は、軽蔑をこめた言葉として使われるようになった。

●世継ぎ（妾馬）

最後までこの咄を聞いて「何故、妾馬？」と思うであろう。妹の鶴は見初められて側室になった。側室は世俗的に言うと妾だからうなづける。しかし、馬は登場しない。八五郎の出世の勢いを出世馬に例えたと言われても、納得する人は少ない。じつは、侍に抜擢された八五郎が使者を申しつかり、乗り馴れない馬に乗って暴走するシーンが省略されているのである。したがって、円生は『八五郎の出世』という題名で演じた。この咄の主題は、一人の女性が世継ぎを産んだことによる変化であろう。個人よりも家の存続を重視する考え方は皇室や貴族にとっては必須であり、更に武家へと受け継がれ、江戸時代には養子制度を使いながらではあったが、商家にまで浸透した。世継ぎを産んだ側室の兄というだけで殿に呼ばれ、気に入られて町人が侍に抜擢される。これを「出世」と呼んだ。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）
法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。
専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。
現代社会についての連載エッセイなどもある。
『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞
『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞
その他著書多数。2005年紫綬褒章。